

## 雲峰の峰

### ～屋久島・宮之浦川ナベカケ谷 100m 大滝 幻の初登～

某年某月

足下 360 度、全て海。陽光を受けてキラキラと輝く大海原は遮る物もなく、遥かに霞んだ水平線が地球の丸さを感じさせてくれる。東シナ海から太平洋に吹き抜ける潮風が心地よい。ここは林芙美子の『浮雲』にも月に 35 日雨が降ると書かれている多雨帯であるが、幸い今日は雲一つ無い快晴である。標高は 2000m に満たないのに、照葉樹林帯から針葉樹林帯、シクナゲが茂る高山植物帯まで豊かな植生が繁茂し、亜熱帯から亜寒帯までの 1500 種に及ぶ植生が垂直に分布している珍しい環境で、日本の植物種の 7 割がこの島で見られ、また固有種も 40 ほどあり、東洋のガラパゴスとも呼ばれているという。清流と樹林が織りなす高層湿原の美しい印象は、日本庭園やアルプス庭園などという俗な呼称を遥かに越えた佇まいであった。動物もサルやシカが島の人口より多く棲息しているという別天地である。平成 5 年、世界自然遺産に指定。さて、ここは何处でしょうか？

鹿児島県は山国であると同時に島国でもあって、琉球弧に沿った離島は数十にも及び有人の離島だけでも 30 近くある。かつて鹿児島に赴任していた頃陸域はよく歩き回ったが、残念ながら島嶼部に行ったのはこの島だけであった。赴任途中、女房と娘が一足早く藤沢の家に戻り、残った息子と二人で暮らしていたが、その息子も鹿児島の高校を卒業して家に帰ることになり 2 人で送別旅行に出掛けたのがこの島であった。神秘の森、太古の島、屋久島。その時は民宿に 2 泊して平内海中温泉に入ったり巨大な一枚岩の花崗岩・千尋の滝や紀元杉、直接海に落下している珍しいトローキの滝などを見て、夜は名物の旭蟹や屋久鹿の刺身などを楽しんだものだった。15 年以上も前のことである。

さて。今年は夏の天候が不順続きであったり、年末に再びアルゼンチンのアコンカグアに行く為の俟約もあって、山らしい山には行っていない。丹沢や箱根の金時山、筑波山、鎌倉天園などの超近場低山ハイキングばかり。遠出といえば僅かに高所順応訓練の富士山、蛭に悩まされた谷川連峰のヒツゴー沢の沢登り、山を始めた知り合いを案内した焼岳だけという情けない体たらく。またまた机上で地図を拡げて鳥になり、タヌキやモグラになって地図の上を這い廻って鬱憤を晴らす羽目に相なった。ア～ア、情けないや情けないや。(しかし、机上登山には実地とは一味違う楽しさと発見もあるのでア～ル)。

折角屋久島くんだりまで遠出をするからには、ドーンと豪勢に行かねばならぬ。ということで、今回は南島特有の豊富な水量の沢登り、孤島の天に屹立する針峰での岩登り、静寂な高層樹林湿原での瞑想、それに加えて縄文杉に太古を訪ね、海中温泉に浸って“アル耐はいまー”症候群を癒し、夜は名産旭蟹と鹿鍋で芋焼酎を呑んで再び“アル耐はいまー”に戻るといった贅沢な山旅と相なった次第である。

以下はその机上漫遊顛末記。

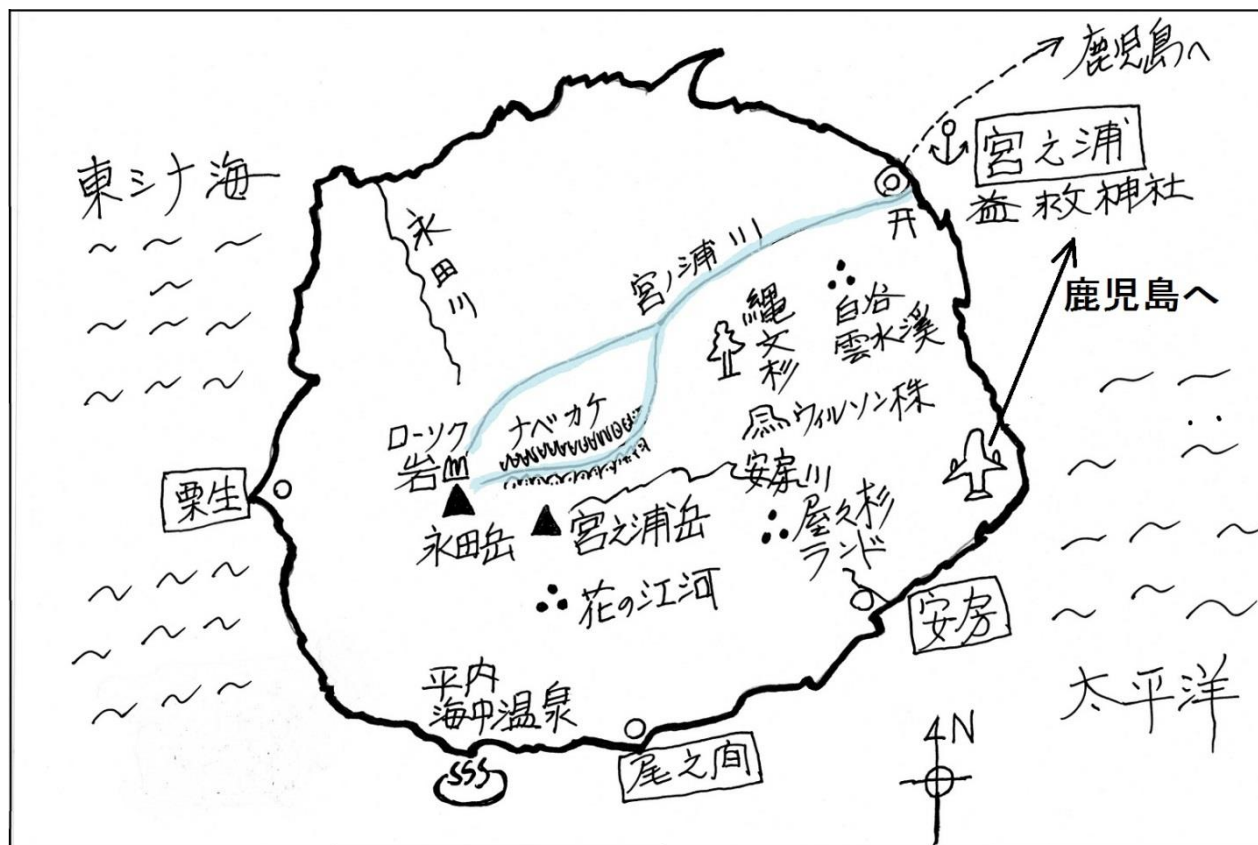
10 日間分の衣食住一式とザイルなどの登攀ギアを詰めたザックは二人とも 50kg を越えた。30kg 以上を背負うのは久しぶりで、早くも玄関でよろめき羽田に辿り着くまでに遭難しそうであった。還暦を過ぎたロートルには分を過ぎた目方である。

屋久島の沢も最近ではポピュラーになって本州からも多くの沢屋が訪れ、また豊富な水流を利用したカヤックなども盛んであるらしいが、やはりまだまだ地の便が悪くて、地元鹿児島大学山岳部あたりの奥座敷であるらしい。

屋久島の地形図を拡げてみる。狭い屋久島にも永田川、宮ノ浦川、安房川など数本の川が流れている。

例によって 3000m の上空に舞い上がって鳥瞰すると、2000m 級の主峰・宮ノ浦岳や永田岳を擁する連嶺が海面から屹立し、その懷には深い緑の溪谷が食い込んでいるようだ。ぐると 360 度の海は東シナ海から太平洋まで濃紺の水平線。北側には佐多岬、南側にはトカラ列島も霞んでいる。ひょっとしたら沖縄諸島の先に台湾が見えるのではないかな。

海拔 2000m まで下降して旋回し目を皿にして探した結果、短いながら獐猛そうなゴルジュ帯が大蛇のごとくうねっているのが目を引いた。ははーん、屋久島の龍はここから昇天し、龍神様となって大雨を降らせているのか。永田岳のすぐ東側に突き上げている宮ノ浦川の源流部、地形図にはナベカケ谷と記載されている。



屋久島の河川はどこでもそうであるが、狭い島域に海から直接 1000～2000m の山々が競り上がっている所以で流程が短い。加えて極端な多雨地帯であるから急勾配を豊富な水が流れ下り、水流で削られた地盤が花崗岩であることもあって本州の沢とは違った豪快な溪相を示している。一説によると屋久島全体が花崗岩の丸い一枚岩だそう(世界で一番大きな花崗岩はアメリカ・アトランタ近くのス通マウンテンと言われているから、この説はマユ唾臭いが・・・)。宮ノ浦川も地図で見ると、海から僅か 15km 程で源流部に達する川であるが、河口から 8km までの下流部は屋久島には珍しい平坦河川であるから、上流部は標高差 2000m 近くを流程僅か 7km で落下するという計算になり、益々嬉しくなってくる。

この急溪を詰め、屋久島第 2 位の高峰、永田岳頂上に直接登り詰めて、頂上の北側に落ちる高距 300m の絶壁、奇岩ローソク岩でトカゲのようにへばりついてこのフェースに新ルートを開拓し、後は屋久島洋上アルプスの盟主宮ノ浦岳から高層湿原や縄文杉を見つつどこかの海岸まで下るという案はどうじゃろか。

上空を旋回しつつ、我が発明になるスキントップ型<sup>※</sup>パソコンを駆使してインターネットで情報を集め、瞬く間に登山計画書を叩き出した。

(<sup>※</sup>スキントップ型とは、思考、意志、要求などに伴う脳細胞微弱電流を皮膚に埋め込んだ電極で集めて増幅し、これをそのままインターネット・プロトコルに自動変換して発信するものであるからキーボードなどによる入力作業が不要であり、また逆に受信した情報もモニターに映すことなく、そのまま直接脳に再現されるというスグレ物である。当然のこと

ながら CPU や記憶装置は我が豊富な脳細胞を利用しているから皮膚に埋め込む装置は体温駆動の極小電池などだけであり、米粒ほどの大きさに過ぎない。(マ、このような道具は我が曾孫の時代になっても無理だな・・)。

鹿児島空港で YS に乗り換え、農道のような屋久島空港に降りてバスで屋久島の中心集落宮ノ浦に入る。ここは鹿児島からのフェリーなども発着する屋久島観光の起点でもある。その日は益救神社に登山の安全を祈願し、安旅籠に旅装を解いて採れたての旭蟹をせせる。お神酒は久し振りの芋焼酎。芋焼酎といえば鹿児島赴任中に随分親しんだ。鹿児島の呑み屋では「酒」と注文すれば間違いなく芋焼酎が出てくる。清酒を置いているのは県外からのお客を接待する高級料亭しかない。鹿児島には 200 を越える芋焼酎のブランドがある。全国区でポピュラーなのは「薩摩白波」であるが、これは都会風なスマートな味に成り下がっていて土俗的で深遠な味わいに欠ける。希少価値としては「伊佐美」というブランドが有名であるが、これは東京では空瓶のラベルだけでも 1 万円で取引されているというから、地元でも手に入りにくいし、それ程の味でもないようだった。天草に近い県北の長島町という島には「島美人」という銘柄があって、薩摩郷土(日頃は農業に従事しているが領主の危急存亡の際には武士となって戦う)の朴訥で質実剛健な気性を薩摩おごじょの洗練されたエスプリで包んだ絶品であった。しかもどの家の台所の土間にも、場末の汚い呑み屋の板敷きにも無造作に積み上げてあるほどの庶民向けであるのが嬉しいではないか。「焼酎」の真骨頂とはかくの如くであらねばならぬ。芋焼酎は鹿児島ではどの銘柄でも統一価格で、1 升が 8 百円なにがしかであった。地元では焼酎をお湯で半々に割る呑み方が多いが、下戸の私は 2 倍に割って呑んだから、1 升が 300 円以下という勘定になり、清酒の 1/5 以下の酒代であった。

閑話休題。さて、翌朝。

カンカラ干の河原に沿った林道を重荷を背負ってウンウンと歩く。宮ノ浦川の下流部は屋久島には珍しく中州などもある広い平坦な河原で、観光で有名な白谷雲水峡から流れ出る白谷川が合流する河口部は 500m 以上の幅がある。

陽光を遮る物もないから南国の太陽に焼かれて流汗滝の如し。しめた、小 1 時間も歩くと川のド真ん中に温泉が湧いているではないか。湯加減も丁度よろしい。砂を掘って湯船を作り真っ裸になって入る。底から温泉の湯が砂を巻き上げて噴出し、まさにジェット風呂である。カンカン照りの陽を受けて呑むよく冷えたセルベッサの味も格別によろし。今回は南国の山旅であるから、ドでかいクーラーと保冷剤を担ぎ上げたので、凍りつきそうなほど冷たいセルベッサを呑むことができるが、缶ビール 20 本を入れたクーラーだけで 10kg を越える。これはタマラン。早く胃袋に収めてしまわなければならぬ。

屋久島の山岳景観は花崗岩の巨大な露岩に屋久杉やシヤクナゲが貼り付いた特異な風景であるが、目の前に聳える耳崩(ミシヅ、1077m)の山頂付近に早くもその姿を現した。「耳」を沖縄流に“ミシ”というのは屋久島がかつては琉球文化圏との接点であったからであろうか。この辺りの杉はかつて江戸時代までに皆伐されたそうで、所謂屋久杉(樹齢千年以上を屋久杉という)はない。

大きな林道が急角度で右手に折れて狭い小径になる所でカネオリ谷に入る。この谷をそのまま詰めれば、縄文杉、大王杉やウィルソン株で有名な高塚山 1396m に登り着くが、我々の“大竜神”が住むナベカケ谷は永田岳から深くえぐれてこのカネオリ谷の左岸に落ち込んでいる。未だ南国の陽は高いが、この出合いの鉄砲水が避けられる小高い台地に天幕を張り、これから一週間の安全を大竜神に祈って流水で斎戒沐浴し、セルベッサと芋焼酎でお神酒を頂く。今宵のエサは宮ノ浦で仕入れたシカ刺とウミガメの卵の目玉焼きナリ。巨大なウミガメの卵は二人でも食い切れないほどだった。

(以下はたまたま手元にあった地理院 5 万図幅に記載された地図記号だけを頼りに、豊かな感性と想像力、卓越したクライミング技術で創造した遡行・登攀記であるから、実際の様相とは異なる場面もこれあることをお断りしておく)

さて翌朝。竜神さまにお神酒と若いウツナナの生贄をたつぷりと捧げたせいか、本日もピーカン。いよいよ大竜神の住処に入る。段々と溪が狭くなってきて、天井に覆いかぶさる巨木は神々しいほど歳月を経た屋久杉である。テレピン油の匂いが爽やかだ。地図には「屋久島杉原始林」の記載がある。左岸から巨大なゴルジュが落ち込んでいる出会いを過ぎた所で早くも大滝が現れた。轟々と爆音を轟かせている大瀑布。落下する水が霧となって上昇し滝の全貌を見ることができない。虹が掛かっている。岩ツバメらしき鳥がこの霧の中を飛び回っている様はまさに昨年訪れたアルゼンチン・イグアスの滝で見た景観とそっくりだ。違うのはイグアスの方は茶色の泥水であるが、こちらは翡翠色の澄んだ水が満々とお釜を満たしている。

さて、これは如何にすべきか。今回は一週間分の荷を持つての行動であるから、いつものサブザックでの沢登りのような訳には参らぬ。まずサブザックで確保支点まで登り、続いて滑車で重い荷を引き上げる戦法をとらねばならない。落ち口を見上げると首が痛いほど高い。流心はとても登れないから周りの壁で何とかする所は無いかと探索するが、壁はすべてツルツルの花崗岩絶壁フェースで足掛かりが全く無い。裏越の滝というのものもあるからと念の為、鳴門の渦潮で産湯を使ったと自称する「蛸」パンチョを唆して抜き手を切らせ、落下する飛沫を潜って滝の裏側を偵察して貰った。なるほど、奴は蛸の生れ変わりだ。そういえば最近はおツムの風貌も蛸八に似てきたナア。（「裏越の滝」とは流心の裏側に空間ができています。ナイガラが有名で滝壁に掘った裏窓から流心を見物する趣向になっている。）

奴程の泳ぎ手でもこの大釜の怒濤の如く暴れ回っている渦には参ったとみえて、イノチから逃げ帰って来た。曰く「確かに裏越だ。落ち口までは 100m ほどの高さがある。途中小さなバンドが 5 本ほど走っている。しかし、落ち口はすごい水流でとても突破できるような代物ではない。最後のバンドが左岸の岩壁まで通じていて、この端が狭いながらレッジ状になっており、すぐ上には屋久杉が 2~3 本生えていて、ここからなら上の樹林に逃げられそうだ。しかし、俺はヤメたぜ。こんな地獄のような井戸の底で鉄砲水が出たら、お陀仏ではないか。早く宮ノ浦の町に降りて床屋の二階に上がってナニをイタそうではないか」「何を抜かすか、このオタンコ茄子。東京から 1000km も離れた屋久島くんだりまで、何の為に来たのかネ。床屋の二階なら東京にもゴマンとあらア。さあ、早く準備をイタセ。水泳はお前がリードで、まずは滝の裏まで取り付け」「しゃあネエなあ。その代わり、今夜は浴びる程芋焼酎を頂くぜ。しっかりビレー致せ」という次第で、大型のアタックザックとセルベッサ入りのクーラーを防水して補助ザイルに結わえて釜に浮かせる。登攀ギアと非常食・非常装備だけ身につけて奴は釜に飛び込んだ。激流にズボンが剥ぎ取られ、パンツも流されて逸物(実は貧しい「一物」)丸出しでやっと滝の裏に辿り着いたらしい。ハーケンを打つ音が微かに聞こえるような気もするが、落下する水音に消されて定かでない。やがてザイルが引かれてビレー解除の合図。

パンチョを叱咤激励する役の小生は、何を隠そう、山国の生まれであるからカナヅチに近い。しかし、奴がザイルで引張ってくれるからマア、大名気分で行くとするか。釜に浮かべた 3 ヶの荷物のビレーを外し、それに結んだ補助ザイルをハーネスに結わえて曳航タンカーよろしく出航であるが、渦に巻き込まれて釜の底に引き込まれたらと思うと、心ノ臓が止まるほど怖い。御名御璽。蛸八に引っ張り上げられて何とか、滝の裏に這い上がり、荷物を引き寄せる。流石、裏越のセンだ(上州では滝のことをセンという)。殆ど垂直に近い滝壁から 3m ばかり離れた空中をドウドウと水の塊が落下しつつ霧となって渦巻きながら上昇している。時折霧が虹となって陽光を透かせるが、滝裏は分厚い流水に閉ざされて薄暗い。何か異形な世界にタイムスリップしたようで薄気味悪くさえてきた。桑原桑原。暫し暗然として、この壁を如何にやっつけるか思案を巡らす。上ばかり見ているので首が痛い。

やっとルートが見つかった。私くらいのベテランクライマーになると、一見ノッペラボウに見えるフェースにもそれなりの岩の弱点が見つかるものである。第 1 番目のバンド迄はフィンガーグジャム程度の細かいクラックが右上している。そこから 2 番目迄は比較的広いクラックが真っ直ぐに上がっており、こ

こはチムニー登りで何とか行けそうだ。3 番目まではハンドジャムで行けそうなクラックがある。4 番目のバンドは比較的広く二人並んで立てそうな気配。ここから 4 番目のバンド迄は何も無いノッペラ状のように見えるが、パンチョが双眼鏡で観察したところ、非常に細かいが何とかホールドが拾えそうらしい。5 番目のバンドはバンドといえるほどのモノではないが、何とか右の狭いレッジまでトラバースできそうである。そこからは猿の木登り式で行けば、上から覆いかぶさる屋久杉の藪に抜けられそうである。

さて。ここから上は水流の轟音で会話は言うに及ばず呼び子の音も全く聞こえないから、かねてから決めてあるザイルのチョンチョン合図に頼るしかない。大根百姓のような節くれだった指をしているパンチョはフィンガージャムは不得手であるから、第 1 ピッチは小生がリードする。この滝は今まで大高巻きで越えた記録はあるが、直登は今回が初登とみえて、残置ハーケンやボルトは一切ない処女滝である。処女というと目の色を変える我が相棒はそれだけでもう興奮極まれの態たらく。興奮ばかりしていないでしっかり確保イタセ！

指にテープを巻いて保護し、頭上の上リに 1st. プロテクションのハーケンを打ち込む。キーンと良い音がしてしっかり効いたようだ。久し振りのジャムは指先がちぎれんばかりに痛い。2 番目のプロテクションはリスが無くボルトをねじ込む。途中ハング気味の箇所、どうしても突破できずモタモタしている内に手がバンプしてアッという間に墜落し、撥ねられて 10m ほど落下。重ねて書いて恐縮であるが、私程のベテランになると落ちる瞬間に壁を蹴って空中に飛び出し反動で壁に打ちつけられる時も軟着陸する術を身体が覚えている。今回はオーバーハング気味でもあったから幸い擦り傷程度で収まった。南無三八幡大菩薩。しかし暫くは動けず、パンチョのテンションに掴まって小半時ほど呼吸を整えざるを得なかった。しかし弱ったことにツルツルに磨かれた壁はホールドが全く無くおまけにハングしているから、壁に手が届かずボルトも打てない。仕方ない、プルージックで登り返すしかない。ハングの庇までプルージックで辿り着いてボルトを打ち、アブミを掛けてやっそこさっとこ乗り越した。

第 1 ピッチをフォローしたパンチョがそのまま第 2 ピッチをリード。チムニーを快適に登って行き、スルスルとザイルを伸ばして頭上に消えた。奴にしては出来過ぎだ。褒めて遣わす。小生はフォローであるから気楽にチムニーを楽しみ、狭い第 2 バンドに二人で立った。しかしこれから重いザック 2 ケとセルベッサの入ったクーラーを引き上げなければならない。滑車を 2 ケ使った 1/3 プルアップシステムで引っ張るが、ザック 2 ケを上げるのが関の山。パンチョ「クソツタレ！ こんな重いビールなんか捨ててしまえ」、我が輩「泣いて土下座して頼むから、ナア、何とか引き上げて下されや。俺はこれが無いと生きて行く力が無くなるノダ」。拌み倒してクーラーも引っ張り上げる。

第 3 ピッチのハンドジャム・クラックもパンチョがリード。ピッチの最後の部分まで登った所で、悲しいかなダックスフントの彼はどうしても次のフットホールドに足が届かず墜落。死角で確保している小生には墜落は見えなかったが、急にドーンとザイルに衝撃が来た。5m ばかり落ちたようだが怪我はなかったようだ。奴は体重が 70kg あり、軽量級の小生は 1m ばかり吊り上げられた。プロテクションが破壊されずよく持ちこたえてくれたものだ。

第 4 ピッチのツルツル・フェースは小生がリード。ボルトの連打でやっそこ乗り越して今度は独りで荷物も引っ張り上げる。第 5 ピッチはパンチョがリード。適度にホールドもあつて問題なく第 5 番目のバンドに到着。そのままザイルを伸ばしてバンドをトラバースし右端のレッジに立った。50m ザイル一杯。今度は奴が独りで荷物を引き上げる番だ。きっと「こんなクーラー捨ててしまえ」とか何とかブツブツ言っているに違いない。セルベッサ吞ませてやらないゾ。どうにかこうにかやっそこ落ち口の右の屋久杉の大木にビレーを取った時には登攀を初めてから既に 12 時間が経過していた。一本の滝を登るのに 12 時間を要した。高距 100m、水平距離は僅か 10m 程の区間に 12 時間掛かった勘定になる。打ったハーケン 18 本、ボルト 21 本。本日はこの大木にビレーしたままでツエルトも張らず野宿に決めた。

蛸になって泳ぎ渡ったお釜は遥か下に翠の宝石のように小さく見える。ドウドウと落下する流水も、もう全て目の下だ。半日振りに燻らす紫煙は実に美味かった。一本目の成功と初登を祝ってまずは乾杯。「それ見ろ、お前が捨ててしまえと言った冷えたセルベッセが美味いだろう。ザマア見ろってなもんだ。イッヒッヒ」。この大滝には名前が無いようだから、初登の我々に命名の権利があるナ。この栄誉は短足ダックス君にもかかわらず奮闘したパンチョに差し上げるとしよう。パンチョ「よし、今晚寝ないで考える」。

此処はガスバーナーを燃やす平地も無い急斜面であるから、今宵のディナーはパンチョお薦めの魚肉ソーセージを齧って誤魔化す。井戸の底のような所に貼り付いて針の穴から天井を望めば、僅かばかりの天の穴は黄金色からピンク色へ、やがて薄紫色から薄墨色に変わって満天の星となった。漆喰の闇であるから星の大きさも瞬きも一段と鮮明である。酒も食べ物もタップリあり、まさに天上の楽園。セルフビレーでハーネスに繋がれたまま、下の滝壺目掛けて御叱呼を垂れる。液体は雲となって霧散。仙人の世界。

天の穴がオレンジ色に染まって夜が明けた。「オイ、昨夜一睡もせず考えたのだがナ、この滝ナア、屋久島蛸壺大滝というのはどうじゃ?」「馬鹿も休み休み言え、そんなのじゃあ、お前の人品骨柄が問われるゾ」「左様か、ではこれはどうじゃ。ナベカケ沢・翡翠ノ大滝」。という次第で今後改訂される地図にはこの名前が記載されるであろうな。早速国土地理院に申請せばならヌ。

神奈備<sup>かなび</sup>た屋久杉の巨木とシャクナゲが密に繁る藪を漕いで崖の天辺に至り、懸垂下降で翡翠ノ大滝の落ち口の上に降りて再びびっくり。これはまた、何という光景だ! 落ち口のすぐ上が巨大なお釜になっていて、釜も滝の壁もすべて巨大な一枚岩をくり抜いたような真っ白な花崗岩の造形である。岩の白、杉の緑、天の碧、釜の翠。東京ドームを逆さにしたようなものに杓の把手から滝水が落下していると考えて頂ければ大凡のイメージを掴んで頂けるであろうか。大きさも丁度ドームぐらいであろう。杓の把手の部分はちょっと急な滑り台となっているが、ヤモリか蛸の吸盤を借りれば何とかかなりそうだ。天上のプール。天気もピーカン。これほどの素晴らしい別天地を何も急いで通過することはないぜ。急ぐ旅ではないから、ここでゆとりと一日中トカゲをやろうではないか。酒は余るほどあるし、岩魚でも釣って豪勢にドーンと行くのはどうじゃ。

二人ともグウタラするのに異存はない。早速真っ裸になって飛び込む。温泉ではないが、南国の太陽に照らされたお釜の水は温泉並に熱い。「オイ、焼酎の一升瓶を水に浮かべてくれ。水上の酒盛りを始めようではないか」「合点の助」。焼酎が廻り、段々眠くなってきた。仰向けに浮かんでボーと惰眠を貪っていると、何か魚になったような気分で嬉しくなる。時々浮かぶのを忘れて水中に没し水を吞まされるがそれもまた酔狂。ただ、うっかりしていると落ち口に流されてそのまま 100m 下の翡翠ノ滝の釜に墜落して大往生となるから、この大石臼の縁にボルトをたたき込んでセルフビレーをとることは忘れなかった。昔、子供の頃、田舎の池で初めて泳いだ時、オヤジが腰綱をつけて水練してくれたことを想い出す。3 時間も入っていると皮膚がふやけてきた。そろそろ今度はオヒルネ・タイムだ。逸物も何も出しっぱなしで石臼のへちに寝転がる。天国。

ここから先は、切り立ったゴルジュの連続で水平距離 10 km、高距 800m を抜けるのに 3 日間を費やした。泳ぎ、ヘツリ、直登、高巻、etc., etc. 水漬けで身体に黴が生えそうになった頃、やっと矮小化した屋久杉がまばらに生えている源流に飛び出した。大岩がゴロゴロした草原状を永田岳の山頂に至る。1886m。九州では第 2 番目の高峰。西側の足下には永田港。直ぐの沖合には口ノ永良部島。その先は東シナ海的大海原。「翡翠」の名称を奉った 100m 大滝の初登を含むナベカケ谷の遡行は終わった。お互い涙目になって手を握り合う。5 日間着けばなしだったハーネスを外して、屋久島竜神大権現に感謝を捧げ、まずは御神酒を一杯。

今宵の晩飯は久し振りのホルモン焼き。自宅の近くのトンチャン呑み屋から分けて貰った臓物の絶品

で、クーラーに入れて持ってきた。漆喰の闇夜ではあるが、遠くの海が放つ夜光虫やら放射光やらの光りだろうか、微かに明るさが漂っている。ここは直ぐ東側に九州の最高峰・宮ノ浦岳もあり、屋久島山地の天辺であるから、最高の眺望を欲しいままにできる。頂上に張ったテントは狭いながらも極楽浄土。

翌日は、永田岳の北壁の垂壁「ローソク岩」の登攀に挑戦。一枚岩の花崗岩が 300m ほど垂直に落ち、下部はシャクナゲと白骨化した屋久杉の巨木に囲まれている。屋久島ならではの山岳景観である。密生したシャクナゲの藪を分け下って壁の基部に至る。見上げる岩壁はローソクのようにスッキリと天に延び、適度のチムニー、クラックやテラスもあって、気持ち良く登攀できそうだ。花崗岩の白とシャクナゲの緑のコントラスト。

長い壁だから途中で一泊ビヴァークが必要になる。5 ピッチ登った所に二人が腰掛けられる広さのテラスがあり、ここでツェルトを被ってインテンショナル・ビヴァーク。海から這い登ってきた夜霧が丁度目の前を漂って行く。微かに匂う海の匂い。パンチョは今宵もたった一人の聴衆に向かって一晩中イビキ唄を唸り続けた。今晚の唄は何かいす。郷に入れば郷に従えか、博多の玄海節、熊本の水前寺節、宮崎の稗つき節から鹿児島のおはら節、奄美の何やら節、琉球の蛇皮線まで歌いまくった。たった一人の聴衆である我が輩はかなわんヨ。そのうちドタリと小生の上に寄り掛かってきた。オイオイ、余り押すなよ。ここから落ちれば一気に三途の川だ。5 日間も川を遡ってきたので、川渡りはもう充分だワイ。(セルフビレーをセットしているから実際は下まで墜ちることは無いが、この暗闇の中でザイル頼りに這い上がるのは御免こうむりたい)。

翌日、遙か足下に東シナ海の大海原を見ながら、残りの 5 ピッチを攀じ登ってローソク岩登攀を終了。古い錆びたハーケンが何本か残置されていたので、かつてここを攀じたクライマーもいたのであろうが、岩場には近年登ったような痕跡はなかった。

これで、ヤバイ沢場と岩場は全て終了。費やした時間は沢と岩の両方で 7 日間、使用したザイルは 9.5 ミリ 50m メインザイル 2 本、8 ミリ 50m 補助ザイル 4 本、ハーケン 48 本、ボルト 39 本、ナッツ類 20 本、カム類 15 本、ヌンチャク 30 本。登攀ギアの総重量は 40kg。

後は、ノンビリと下るだけである。主峰宮ノ浦岳から眺めの良い稜線を南下して花之河、小花之河の高層湿原を楽しみ、引き返して高塚山の縄文杉や大王杉に太古の屋久島を想い、小杉谷の林道から安房に下って、その夜は安房の国民宿舎に投宿。またまた名物の旭蟹をたらふく頂いた。翌日島の南側にある平内集落まで送迎して貰い、海中の湯「平内海中温泉」に浸ってこの豪華山行を終わったのであった。めでたしめでたし。

(2003/11/22 記)

(本稿 完)

[「夢幻の山旅 私の机上登山」目次へ戻る](#)